

「環境都市日本一を目指した 水郷ひたづくり」 佐藤 陽一 大分県日田市長

大分県の日田市長の佐藤でございます。本日はこういう場をいただきまして、感謝申し上げます。と思います。

私ども、「環境都市日本一を目指した水郷ひたづくり」ということでお話をさせていただきたいと思います。先ほど北杜市の白倉市長さん、環境日本一を目指すということで、私どもも負けられないように競い合ってやっていかなければいけないなという思いがいたしております。

初めに私ども日田市の紹介をさせていただきたいと存じます。日田市は、九州北部のほぼ中央にありまして、2005年に合併しまして現在人口が7万2,000人の都市となっております。また、日田市は九州一の大きな川であります筑後川の源流、上流地域を占めております。市の中心部には筑後川が流れておりまして、市の面積の約8割は山林というところでありまして、豊かな森がありまして、この森が清冽な水を生み出し、川となって私たちの生活を潤していただいておりますし、また、福岡都市圏に対しまして水を供給している、そういうまちでもあります。

そこで私たちは、日田は水が生まれ、そして育つ水のふるさと、「水郷ひた」というふうに呼んでおります。この「水郷」という漢字を「すいごう」と読むのが普通ですが、私たちは「ごう」じゃなくて「すいきょう」と読んでおります。それは水のふるさとと、そういう思いを込めて「きょう」と読んでいるところでもあります。

今私たち日田市は、「環境都市日本一」を目指してさまざまな取組を始めておるわけですが、そのスタートは1998年にISO14001の認証を取得した、そこから始まったわけでありませう。なぜ「環境都市日本一」を目指すようになったかといいますと、資料にも出ておりますが、1997年ダイオキシンがいろいろ話題になったころであります。私どもの市の清掃センターでダイオキシン濃度を測りましたら、基準値が80のところはその3倍の240ナノグラムという数値が出ました。「水郷ひた」に暮らす市民はショックを受けまして、なぜ日田の環境はそんなに悪いのかということで、この清掃センターはもちろん施設の改修を行いましたけれども、「水郷ひた」の名誉を奪還ということでISOに挑戦し、これを取得したことによりまして、それでは「環境都市日本一」を目指そうという取組を始めたところでもあります。

そのISO14001の効果としましては、資料にもありますように市役所における環境の負荷を低減したり、職員の意識改革、環境へもっと関心を高めると、そういう変化も起きておりますし、また、具体的な経費節減の面でも効果が出ておるところであります。

そして、もう一つ私たちが始めましたのは、2000年から子供たちを中心に環境を考えてもらおうということで、学校版ISOの取組を行っております。これは市の独自の取組でございます。例えばこの写真は、日田市にあります三隈中学校ですが、子供たちは自分たちの三隈中という言葉の頭にとりまして、それぞれ自分たちで目標を決めて環境に優しい、また、環境を考えるいろいろな取組をやってもらっているところであります。

その一つは電気や水道の使用料をグラフにしまして、前の年と比較をしながら節減に努めておるといことでありますし、また、その節減の仕方につきましてもわかりやすく、水道の水を出す時は鉛筆の太さでというような、子供ならではの発想も出して取組を進めているところであります。この環境を守っていくということからは、やはり子供の時から環境の大切さ、こういうものをやっぱり身につけていくべきだということで、現在市内のすべての小学校・中学校でこのような取組を行っておるところであります。

このような私たち日田市の中で、低炭素型社会に向けていろいろな取組をしておりますので、ご紹介をさせていただきたいと思っております。まず一つは、日田の産業特性を生かした低炭素型社会づくりということですが、この資料は日田市の工業統計です。ご覧になったらおわかりになりますが、一番飛び出ているところがあります。これは木材産業であります。日田の事業所の数を数えますと、約4割が木材関係の事業所であります。また、従業員も同じような状況になっておりまして、いわゆる林業のまちというのが一つの特色であります。

もう一つは、これは日田市の農業生産額の表であります。一番多いのは牛乳であります。いわゆる酪農、これが農業生産額133億円ほどありますが、約4分の1を占めていると、そういう酪農が盛んな土地でもあります。

このような産業の状況の中から「バイオマスタウン構想」というのを、2005年に国の支援を受けまして立てたところでもあります。これは畜産から出るふん尿の処理、また生活の生ごみ、そして、木材に起因しますさまざまな建設廃材やバーク、いわゆる木材の皮でありますけれども、そういうバイオマスを活用していろいろなことをやっていきたいと思いますということで、この構想をうたったわけでもあります。

その一番中核となるものについてご紹介させていただきたいと思っておりますが、これは市が建設いたしました「バイオマス資源化センター」であります。生活生ごみ、また豚のふん尿、生活排水処理の汚泥を集めましてメタン発酵をし、そのガスで発電を行うというものであります。

また、この処理過程で最終的に残りますのが液肥、液体のものであります。これは肥料として、また、個体で残るものにつきましては堆肥として農家に還元して、日田式循環型農業と

いうふうに子どもは呼んでおりますが、それにつながっているところでもあります。

この施設は2006年に完成しまして、約9億5,000万円ほどかかりました。処理能力が1日約80トン、発電能力が340キロワットということでもあります。私も驚いたんですが、生ごみの分別収集を市民の方をお願いいたしました。集まってきたごみの約9割が、きれいに分別されたものとして収集をされているところでもあります。

次にご紹介するのはバーク、先ほど申し上げましたが、スギやヒノキの皮、これを処理する施設として日田市には、現在丸太を扱います原木市場というのが7社、それと、製材所が80社ほどございます。ここらの製材所のほうからは、木材を加工する際に皮が廃棄物として出てまいります。年間約3万3,000トンという量でございますけれども、これまでこのバークをどう処理していくかというのが大きな課題となっておりました。課題となっておりますように、写真の下の方には大きな山が築かれるというような状況でありましたが、このバークを民間の企業の方の提案がありましてペレットに製造するという取組を、2007年に始めたところあります。

民間の会社が出資してバークペレット製造工場をつくっていただきまして、この処理量が年間1万4,000トンから2万5,000トンと、かなり我が国でも大きい規模の工場であります。ここでバークを処理しましてペレットにして、現在の主な流通先は火力発電所で燃料として使っていただいております。

この写真がバークペレットであります。左側はいわゆる樹皮でつくったバークで、右側の白いのが樹皮じゃなくて「のこくず」とか間伐材とか、そういうものでつくったペレットで、主に家庭用のストーブで使われているのは右側の白いペレットで、左側の子どものペレットは、燃やすと若干「すす」が多く出るということで火力発電所の燃料が主であります。

次にご紹介するのは、木質チップ等によります発電であります。2006年に日田ウッドパワーという、これも民間の企業を誘致いたしまして、建設廃材など木質のものを燃料に発電を行っております。年間10万トンの木質チップを使用して、発電量が1万2,000キロワットというような状況でございます。このように日田市は、バイオマスに関しましてさまざまな取組をしております。あるところからは日田市は、「バイオマスの百貨店」というようなことも言われておるところであります。

次に、日田市の自然環境を生かした取組についてご紹介させていただきたいと思いますが、私たち日田市は盆地のまちです。周囲を山々に囲まれております。時々日本一気温が高くなるのが、私たち日田市であります。日本でも有数の暑いところというまちでありまして、これま

での最高気温は39.3度であります。

そこで、暑いまちですから太陽光発電に力を入れようということで、小・中学校、公共施設を中心に7施設で、合計200キロワットの太陽光発電の発電機を整備しているところであります。去年から今年にかけてやっておりますのは、市内に中学校が8校ありますが、ここに全部クーラーを設置しようと、そのクーラーの電力は太陽光発電で賄おうという取組をいたしております。全国的に暑いまちでありますので、中学校の子供たちは汗をかきながら勉強しておりますので、クーラーを整備して学力を上げるよう、これも市の取組としてやっておるところであります。

また、個人のお宅の住宅用の太陽光発電システムの設置につきましては、国の補助に市単独で3万円、1キロワット当たり上積みをして、設置の支援をいたしておるところであります。これもなかなか評判がよく、私どもの計画を上回る形で設置が行われております。

また、日田は盆地のまちで周囲には山々がそびえておりますので、その山の上で風力発電をやっているところであります。245キロワットを2基設置しておりますので、この設置しているところは観光施設がありますので、この風力発電でお湯を沸かしてお風呂に入ってもらい、そういう取組もやっておるところであります。

次は水力発電でありますけれども、これは2002年に「日韓ワールドカップサッカー」がありまして、その時カメルーンチームがキャンプした中津江村というところに設置しております。2003年に設置いたしておりますので、2008年度42万キロワットを発電しまして、ここも観光施設等の近くにございますので、観光施設の電気を賄っておりますし、一部は九州電力に売っているというようなところでありますので、今年度新エネ百選に選ばれたところであります。

現在、私ども日田市では、市の施設で発電をやっております。その結果どのくらいCO₂の削減につながったかということを示している表でありますけれども、2008年発電量が282万キロワット、これはCO₂削減量に直しますと約1,000トンということになっております。

このように日田市の産業特性、また、自然の環境を生かしてさまざまな取組を私たちはやっておりますが、その背景には私は「水郷ひた」という遺伝子があるんじゃないかというふうに考えております。

それを幾つかご紹介させていただきたいと思いますが、まず最初は、この写真は日田にあります小鹿田の里、小鹿田焼おんたやきという焼き物をつくっている地域でありますので、ここの焼き物をつくります土は、ご覧のように川の水を利用してアカマツでうすをつくって使う。それで土を砕いて、それを焼き物として陶芸の皆さんがつくっているというようなところで、水の自然エネ

ルギーを使いながら、これは17世紀から続いているものでありまして、国の重要無形文化財の指定も受けております。

また、もう一つ市内で500年ほど前から行われておりますお祭りに、「祇園祭」というのがあります。これは全国的にも珍しい10メートルを超える山鉾が脚光を浴びる祭りではありますが、国の重要無形民俗文化財という指定を受けておりますけれども、この山鉾をどうやってつくっているかといいますと、模型の写真でありますけれども、日田の山から出た木材を使ってくるのは1本も使わず組み立てております。

また、この山鉾の車輪には、樹齢約100年を超えるアカマツの材を使っております。最近ではアカマツの材が全国的に少のうございますので、一昨年市民参加の森づくりということで、100年後の山鉾の車になるよう、アカマツの植樹を市民の皆さんと一緒に行ったところであります。

次に、日田のまちに三隈川が流れておりますが、その川面に浮かべた屋形船の写真でありますけれども、これも昔から日田で行われております船遊びであります。観光的に大きな目玉になっておりますが、これもエネルギーは人力で動かすというようなものであります。

この写真は花火大会ですけれども、たまにはCO₂をいっぱい出してもいいんじゃないかということで花火大会を、夏の暑い盛りにやっておるところでございます。

このように豊かな自然環境に囲まれて自然に親しみ、その恵みを生かした営みや暮らしは、今も続いている「水郷ひた」であります。これらをどうやってつなげてきたか、私が思うには一つは教育ではないかと思えます。そういう教育の面から日田には広瀬淡窓^{たんそう}という、江戸時代の末期から明治にかけてでありますが、広瀬淡窓^{たんそう}先生が開いた私塾、全国有数の規模を誇った塾であります。そういう教育というものこの遺伝子を培ってきた、またつなげてきた一つではないかと思っております。ここの「咸宜園^{かんぎえん}」という名前の私塾は、「世界学問教育遺産」として登録を目指しているところであります。

最後にこれらの取組や遺伝子によりまして「水郷ひた」、これからより一層、低炭素型社会を目指して動いていかなければいけないというふうに考えておるところであります。そのためにはライフスタイルを変えていく、これが一番肝心ではないかというふうに思っております。また、そのための具体的な動きを、市民の中にも培っていかなければいけないというふうに考えておるわけですが、その1つの取組としてマイバッグ運動を推進いたしております。これを入り口にして市民の皆さんに低炭素型社会、このことについて考えを深めていただき、身の回りからできることはやっといこうと、そういう動きを起こしていきたいというふうに考

えるところであります。

また、コミュニティ交通、デマンドバスというものを、市の周辺部を中心に取組を始めていくところであります。これは高齢化する中でやむを得ない取組の1つではありますが、結果として車からバスへというモーダルシフトにつながってくるものと思っ、これからも予算はたくさんかかりますけれども、取り組んでいかなければいけないというふうに思っているところであります。

「水郷ひた」に私たちは暮らしておりますけれども、低炭素型社会を目指していく上で最も大切なことは、やはり「水郷ひた」というふうに申し上げましたが、森を守る、また、水を守る取組ではないかというふうに考えております。日田の森林、約5万ヘクタールほどありますが、この森林が1年間に吸収しますCO₂の量を計算しますと、人間が1人当たり出す量で換算しますと、約100万人の人間が出すCO₂を吸収しているという役割を持っているところであります。

これからも「水が生まれ育つまち、水のふるさと水郷ひた」ということが誇りにできるように、また、自慢できるように市民の皆さんと一緒に取組を進めていきたいと思っ、その結果が間違いなく低炭素型社会の実現につながるものではないかというふうに考えておるところでございます。

以上で私のお話を終わらせていただきたいと思います。御清聴ありがとうございました。